

本を選ぶ

NO. 393 2018年(平成30年)2月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん> Shirokanipe ranran pishkan
- 司書の眼 第31回
- 本を通して人と出会う
- とある科学翻訳者の日常⑦
- 選書の法則:S.R. ランガナタンからの187のメッセージ(12)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

Shirokanipe ranran pishkan

しずく 銀の滴降る降るまわりに

自宅の玄関口と離れの小屋に本をおいて毎週土曜日に文庫を開いている。(風信子文庫 2013年8月6日開設) 数年前から本の出前をとという声がかかり、現在3カ所に貸出し。最初に出前の注文をしてくれたのは、海と山が間近にある佐波という集落の中にある産の森学舎というフリースクールだ。元、牛舎(その後納屋)の2階をスタッフが手作りで改装し、2015年4月、3名(小学1年生2人、4年生1人)の子どもたちで開校、4年後の今は19名が通っている。スタッフは開校時の保護者でもある大松康・くみこ夫妻と西尾博之・昌子夫妻、それに隔週だが「音楽」と「しぜん」の科目の外部講師の河合拓司さん(ピアニスト、作曲家)と野島智司さん(ネイチャーライター)で、「くらし」と「あそび」と「まなび」をつなぐ、体験・表現・対話などを大切にしたい、子どもも大人も成長するための場づくりを目指されている。

「もじ」「かず」「美術」「作家」のいずれかひとつの授業が午前中に行われているが、できることなら私自身、子どもたちに混じって参加したいと思う時空がそこに広がっている。最近の「しぜん」の時間では、椿の実をすり鉢ですって油をとり、近くの海

で小エビを捕まえ、椿の油で食べたとのこと。昼ごはんは子どもたちが自ら決める当番の日に、その日の食材をみて毎日作っている。

学舎では開校した年の11月、本を真ん中にした集いの場づくりを目指して「さんのもり文庫」を開設、毎月、数名の人にお気に入りの本を木箱一箱分を借りて展示している。(子どもも出展)

1月某日、出前の本を並べていると、くみこさんから「さんのもり文庫で初めて漫画の本を1冊買います」と言われて1冊の本を手渡された。昨年の11月に刊行された『知里幸恵とアイヌ』(ひきの真二、三条和都著、監修・銀のしずく記念館、解説・池澤夏樹 小学館・学習漫画人物館)だった。学舎の女子生徒の1人、地域の公立図書館のめばしい本はほぼ読みつくしている彼女が図書館の新刊の棚で見つけ借りてきて、学舎で買ってほしいと言った由。驚いてその場で池澤さんの心にしみこむような明解な解説を一気に読んでいた。

北海道登別生まれの知里幸恵は「シロカニペ(銀のしずく)ランラン(降る降る)ピシカン(まわりに)」で始まる「鼻の神の自ら歌った謡」を冒頭に、13篇のアイヌの神謡が収められた『アイヌ神謡集』を書き上げ、タイプ印刷の校正を終えたその晩、1922(大正11)年9月18日、心不全で急逝、19歳3ヵ月の命。翌年の8月、郷土出版社から出版。知里幸恵の本を手にして私が驚いたのは、私自身の知里幸恵をめぐってのいくつもの出会いが一気に体の中を駆け抜けるようであったからだ。(次号に続く)

(才津原 哲弘)

司書の眼 第31回

—「誕生日まで」—

鷹野 祐子

昨年の12月に父が亡くなった。8年くらい前から、母の料理の塩加減がおかしくなって、アルツハイマー型認知症の診断を受けたのが6年前。それから老々介護がはじまった。認知症の初期は患者本人も混乱しているため、暴言や気分の浮き沈みが大変だったのだが、足が弱かったのと坂の上に住んでいるのが幸いして徘徊などはなかった。けれど、子どものおむつも取り換えたことのない父には、排せつ物の処理は大変だったようだ。毎朝濡れたシーツと着替えを洗濯する。はじめは母がおむつを履くのに抵抗し、家中でソソウをする。認知症対策にと飼った犬にもソソウされ、だんだん薄汚れていく家はストレスだったとおもう。それでもしばらくはヘルパーさんに頼ることを拒否し、食事介護に入ってくれたヘルパーさんの料理も口に合わないと言っていた。

図書館で借りる4冊を1週間で

信州の酪農家の三男坊の父は、戦争中もひもじい思いをすることもなく白米を食べ、畑仕事も手伝わず、居間でいつも本を読んでいたという。実家の跡取りを長男に任せて大学に進んだ。少し上の次男と一緒に東京で就職して、得意先の会社社長のお嬢さんをお嫁さんにもらって、そのまま東京に住みついた。社宅暮らしから一軒家を建て、そのまま50年近く暮らした。いわゆるサラリーマンであったが、定時退社を死守していて、午後6時には子供と一緒に食卓についた。読書が大好きで、毎週図書館で借りる4冊を1週間で読み切った。お酒を飲まなかったからか職場の付き合いのためか、将棋、麻雀、囲碁、ゴルフ、釣り、スキー、スケート、パチンコ、ビリヤード、競馬と一通り何でもできた。覚えているのは、多湖輝の「頭の体操」がたいそう好きで新刊が出ると買っていた。私はアインシュタインの相対性理論をこの本で知った。寡黙な父と話した記憶はあまりなく、いつも、本を読みながらラジオの競馬や野球を聞

きつつテレビのクイズ番組を見ていた。パソコンなど新しいものが好きだったので、初めて買ったのは、Macintosh Classic、その前にもワープロが何台かあったかもしれない。

炊事・洗濯・掃除生活

「お母さんは家庭にいるもの」と決めて、母が働きに行きたいといっても出さなかった。下宿人の多い家で育った母は、社交的な和裁職人だったので、和裁を教えるほか、数えきれない趣味をもち、それぞれ教師レベルまで習っては教室を開いていた。最後の方は、「おかみ」になりたい、とって食品衛生の資格までとっていたけれど、元来商売ができる性格でもなく、お店計画はほどなく終了した。今思うと、母はいろいろやりたいことがあったわけではなく、誰かに認められたかったんだな、と思う。もちろん和裁職人としては腕は良かったようで、仕事はひっきりなしに来ていたが、個人のお客さんに喜んでもらうのと、社会で評価されるというのはちがうのかもしれない。「自分はなにかのために役立っている。必要とされている。」という感情が認知症を遅らせるという。その点では可哀そうなことをしたなあ、と思うのである。

実家にいるときも、学生時代も特に料理などすることもなかった父は、介護生活で毎日の食事と買い物を担当するようになった。料理番組をみても新しい料理に挑戦し、畑で取れすぎたナスでカレーを作ったり、サラリーマン時代には考えられなかった炊事・洗濯・掃除生活をしていた。認知症の母をまあまあとんだめつつ、日々のんびりと暮らしていた。父が驚いたことの一つは貯金の少なさだった。サラリーマンで定年まで働き、シルバー人材で75歳まで働いたのに何も残っておらず、むしろマイナス。社交的で珍しいもの、おいしいものの好きな母は、地方から名品を取り寄せては知り合いに分けていた。家にいることが多いからか、ユーセン、ケーブルテレビ、保険、太陽

光発熱、大型掃除機、マッサージ器、布団など勧誘されては購入していた。グレーな訪問販売の上客だったらしい。認知症になってからも、過去に購入した通販の勧誘電話がくると、二つ返事で購入してしまい、本人が忘れたところに知らない商品が届く。しばらくはこの対応とお金の工面で大変だった。どうにかお金の面で落ち着いたところに、父のガンが発見された。

在宅で

実は父は50代後半に糖尿病を患っており、そこから摂生した生活をしてきたからか、定年後「門前の小僧習わぬ畑仕事を始める」と毎日畑仕事にいそんでいたからか、犬の散歩を毎日2回1時間以上していたからか、大変元気であった。そこで、すでに80を過ぎた後期高齢者であったが、がん細胞は大変元気であったようで、主治医は放置をすすめなかった。ガイドラインにそった治療が進み、抗がん剤は拒否したものの、いくつかの新薬を試しているうちに、骨転移の痛みが増し胃腸が弱り、体力が落ちていった。

父が亡くなる1年前くらいに2番目の父の兄が入院したりして兄弟で会うことが多くなった。その兄も大変元気な人で、杉並から荻窪まで散歩に行き、コンビニで低血糖で倒れて救急搬送されたという。しかし散歩の途中で骨折したりしてだんだん体力が落ち、昨年2月に亡くなった。その時他の兄弟に自分のがんの告知をしたらしいが、信じられないくらい元気であった。

4月に信州の実家に家族旅行をした。孫5人娘3家族をつれた大旅行であった。父の遺影はその時に長兄と並んで撮った写真となった。

12月3日は父の誕生日で、2日の夜は孫たちと夕飯をたべにいった。いつものところに座って、「食欲がないんだ」と言っていた。次の日も具合が悪そうだったので見に行くと、母の介護用ベッドに寝ていた。カーテンを開けると、大好きなたばこを吸うために起きてきたが、いつものベランダに出る体力がなく、あきらめてテレビで競馬をみた

らまた寝てしまった。簡単に誕生日の夕食をとり、明日の月曜から入院してもらおうよかね、と話していると、「今更入院してどうするんだ」と言っていた。2番目の娘が一晩つきそうというので任せて帰った。その晩午前1時に父が息をしていないと電話があり、すぐに緩和ケアをしてくださっていた在宅医と訪問看護師にきてもらった。看護師さんは丁寧にいつもの「寝ている父」にしてくれた。旅立ちの服も犬の散歩ルックだ。在宅で死ぬということはこういうことだ。

Do The Hokey Pokey

誕生日というのはおめでたい時でもあるが、一番死に近い時でもあるらしい。米医療専門誌 *Annals of Epidemiology* 22巻8号(2012)に“Death has a preference for birthdays”という論文が発表されている。誕生日に亡くなった人の割合は、ほかの日に比べて13.8%も増加し、さらに年齢が上がるにつれ割合が高まっていくことが分かった。しかも亡くなった人の死因を調べると、自殺に限らず、病気が原因で命を終えた人も少なくないという。「誕生日まで」を目標にしてしまい、よく生きた、と安心してしまふのだろうか。そういえば先に亡くなった父の兄も、あと一週間で誕生日だったので、誕生日までいかなくて残念だったね、と言っていた。誕生日を迎えて、大好きなたばこも飲めなくなったし、これ以上生きていたら入院させられちゃうなあ、と思ったのかもしれない。

父の入院から介護老人保健施設(老健)にお世話になっている認知症の母は、帰る家がなくなってしまうので老健にはいられなくなってしまうらしい。なんでも、老健はリハビリして退院することを目標にしているので、帰れる家がないといられないのだそう。まだ子育て中の娘たちの家に行っただとしても知らない土地だ。住み慣れた家で、家族と一緒に最後を迎えられて父は幸せな人だった。

(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

本を通して人と出会う

—神保町ブックフェスティバルでの出来事—

溝上 牧子

10月最後の土日、もしくは11月の祝日を含む土日は毎年恒例の神保町の本のお祭り、神保町ブックフェスティバルが開催される。その少し前から古本祭りが始まり、古本市の終盤の週末にブックフェスティバルと合体し、新本、古本もなんでもありの本の祭りの絶頂を迎える。日本の中でも大きな本のお祭りの一つといえるのではないだろうか。数えてみたら、私が勤める朔北社でも第7回から今回の27回まで通算20回もこのお祭りに参加してきたことになる。毎年いろんな出会いがあり、それなりに印象が残る出来事があるのだが、今年の神保町ブックフェスティバルではいつもよりも更に印象深い3日間であった。

その1つ目は2日目の夕方のこと。中学生か高校生の女の子2人組みが朔北社のワゴンにやってきて、同僚に、オススメの本ありますか？と聞いてきた。いくつか、うちの本を読んでいるらしい。同僚が何冊か紹介すると手にとって本を見ている。会話を交わすうち、まっすぐな目を向けながら「毎年ここで（朔北社）は必ず買おうって決めてるんです！」と言うではないか！ こんな若い読者がそんなことを言うてくれるとは！ 思わず嬉しくて胸が熱くなる。結局同僚がすすめた2冊に納得し、嬉しそうに買っていった。私たちの心に爽やかな風を残して。

そして3日目の昼過ぎのこと、色の黒い外国の女性が詩の本の1冊を気に入った様子。しかし値段を言うと、「〇〇〇円じゃだめか？」とディスカウント交渉してきた。ちょっと悩んだが、最終日。「OK！」といたら喜んでくれた。同じシリーズの他の本も見せる。丁寧にみてくれたが、やはり最初の1冊だけ気に入ったらしい。少しは会話でもと中学校でならった「どこから来たの？」と英語で聞いてみた。言っではみたものの、聞き取りには自信がない。社長とちょっと困っていたら、背中合わせの出版社の人が助け舟を出してくれる。彼は、全然そんなふうに見えないのに、英語ペラ

ペラの人だった。人は見かけによらない。あつという間に、会話が成立。こんな特技があったのかと感心してしまった。本を買おうとしている彼女はアメリカ、テネシー州から来たという。テネシー州といえば20年以上前に両親が数年間住んでいた場所。親しい気持ちになる。本の代金をもらい、つたない単語だけの私とテネシーの女性、助けてくれた彼との英会話が続いたが、ふと買った本を差し出された。「???…」と私が困惑していると社長が「記念に本にあなたのサインがほしいそうだよ」というではないか?! なぜ? 私のサイン? そして私が躊躇していると社長が私に書くように促す。ローマ字と漢字でと社長命令が下る。もともと筆記体が苦手なのだが、サインという筆記体でかっこよく描きたくなくなってしまふ。書き始めて気づいたが、結婚してからこっち、ローマ字の筆記体で自分の名前を書いたことが一度も無かったことに気づいたがもう遅い。zの筆記体はどうだったっけ? 適当にごまかしたのを社長が少々修正。日付も書けというのでその日の日付も。笑顔と握手を交わして別れた。他人の本にサインをするという奇妙な体験。一生忘れないだろう。

そして3日目の朝、息を切らせて年も中ごろの女性が「あつた…ここを目指してきたの」とのこと。私が「ということは、うちの本を何かお読みになったことがあるのですか?」と聞くと「ええ」とのこと。しかしタイトルを言うわけではなく、聞いていいのか悪いのか悩んでいるうちに聞けなくなってしまった。しばらく本を選び、渋めのチョイスで2冊の本を購入して下さる。そしてその日もう一件…閉店間近になってからのこと、3、40代の元気な女性の2人組みがやってきた。わいわいいいながらここ何? いい本ばかり…と夢のような褒め言葉。これは夢じゃないかと思った。この3日間の出来事は何かのご褒美か? これらの出会いを胸に、この1年また頑張れる気がしてきたのだった。(みぞかみ まきこ:朔北社)

とある科学翻訳者の日常⑦

片神 貴子

普段読まないような本を手にとってもらおう。埋もれている本を読者に届ける。今回はそんな「本と読者をつなぐ」をテーマに、最近気になっている2つの動きについてお話ししたいと思います。

文豪ブーム

「文スト」と「文アル」をご存知ですか？ 若者に人気の漫画『文豪ストレイドッグス』とゲーム『文豪とアルケミスト』の略で、どちらにもイケメン化した文豪たちが登場します。こうした作品の影響で、いま若者のあいだで文豪ブームが起っています。

文ストはアニメ化・小説化・2.5次元舞台化もされ、各地にある文豪ゆかりの文学館ではコラボ企画が多数行われています。特に作品の舞台となった横浜市では、聖地を巡るスタンプラリーや、市立図書館でのコラボ企画などが盛んです。また、角川文庫はカバーに文ストの絵を採用したところ、売り上げが大幅にアップし、何度も重版がかかっているといえます。

一方、文アルの反響も大きいようで、「青空文庫」で文豪作品の利用者や入力・校正ボランティアが増え始めたのは文アルの影響があるらしい、とNHKのニュースで報じられたほどです。新潮社も文アルとコラボしてアンソロジーを出版し、文庫カバーにも採用しています。

賛否両論

実在した人物をモチーフにはしていますが、あくまでもフィクションですから、必ずしも史実に忠実ではありませんし、実際には男性なのに女性として描かれている文豪までいます。それゆえ、「文豪を冒涇している」「遺族にも失礼だ」等々、批判の声があるのは事実です。私もここで作品自体を論じるつもりはありません。

しかし、きっかけは何であれ、本を手取る人が増えるのは大変素晴らしいことではないでしょうか？ 我が家の中学生の娘も、文スト・文アルを入り口にして、文豪作品をせっせと読むようになりま

した。親や教師が勧めるだけでは、たぶん、きっと、絶対に読まなかったと思います。

また娘は、漫画『ちはやふる』やゲーム・アニメ『刀剣乱舞』にはまったことで、百人一首や日本史のみならず日本の文化全般に興味をもち、関連する本を読みまくるようになりました。漫画・アニメ・ゲームが若者の世界を広げるのに一役買っているのは、間違いなさそうです。

翻訳書のクラウドファンディング

次にご紹介したいのは、2016年に始まった「サウザンブックス」という翻訳出版サービスです。

世界には価値ある面白い本があふれているのに、日本語に翻訳されるのはごく一部に限られます。というのも、翻訳書の場合、初版部数が少なくとも3000部は見込めないとビジネスにならないため、従来の出版システムでは、万人受けする内容の本しか出せないからです。

そこでサウザンブックスは、ネットを通じて不特定多数の人から資金を調達する、「クラウドファンディング」の手法を利用することにしました。資金が集まってからスタートするこの方式なら、大赤字になる心配がなく、1000(サウザン)部からでも作れることから、この社名が付いたそうです。

ニッチでマニアックな本

サウザンブックスのHP (<http://thousandsofbooks.jp/>)を見ると、フィリピンやトルコといった英米以外の作品や、鷹狩りマニュアルやLGBT小説など、大手出版社では扱わなさそうなニッチな作品が並んでいます。趣味嗜好が多様化している現代、マニアックな本でも、日本語訳があれば読みたいという人は一定数いるのではないのでしょうか？ 読者が企画や出資のかたちで出版に参加できるこの仕組みは、電子書籍とともに、本と読者をつなぐ新たな潮流になるのではないかと感じています。

7回にわたり連載してきたこのエッセイも、ちょうど一年たちましたので、ひとまず今回で一区切りにしたいと思います。お付き合いいただきありがとうございます。ありがとうございました。(かたがみ たかこ：翻訳者)

選書の法則：

S. R. ランガナタンからの187のメッセージ (12)

吉植 庄栄

12. 第二法則と選書・下

『図書館選書論第2版』の内容を、ランガナタンがよく使った架空の対談方式で紹介中である。

【登場人物】○ランガナタン：図書館界のビッグスター、S. R. ランガナタン (1892-1972) 先生。
○第二法則くん：ランガナタンの著作『図書館学の五法則』に出てくる「いずれの読者にもすべて、その人の図書を (Every reader his/her book.)」という2番目の法則。原作に倣ってしゃべります！

ランガナタン (以下「ラ」)：さて今回は、利用者の要求と図書館の蔵書構築の話をしてしよう。

第二法則くん (以下「二」)：利用者が読みたい本をできるだけ揃えたいけど、図書館の蔵書構築方針があるよ、という話ですよ。

ラ：そうそう。顧客満足度 vs 図書館の運営方針という感じだね。

二：詳しく、教えてください。

ラ：利用者が読みたい図書の分野と、図書館の蔵書構築計画で考えている図書の分野比には差があります。

二：どんな分野が顕著ですか？

ラ：当社独自調査 (注：1939年インド・マドラス市) によると、図書館で受け入れた図書の分野比、そして図書館で利用者が使った図書の分野比が大きく違うのが、数学、法学、物理学、化学、そして教育学の分野だ。

二：つまり図書館の蔵書量と、利用者との人気に差があるということでしょうか？

ラ：そういうことだ。特に法学と教育学の分野は受入比率の順位よりも、大きく利用率が高い。つまり図書館が考えている以上に、利用者は必要としているのだよ。一方逆に、数学、物理学、化学は、図書館が準備した蔵書が使われていないのだ。

二：そこに、利用者の要求と蔵書構築方針の差が出るのですね。

ラ：そうなのだよ。ただ、データの取り方には気をつけなければならない。

二：大学で人気の問題集は、教育に分類されちゃうから、一見教育学の人気が高いように見える、という仕組みですか？

ラ：そうなのだ。

二：一言で利用者の期待に応える選書、といっても容易ではありませんね。

ラ：そもそも図書館蔵書の基本部分をどのように揃えるかであるが、この点も、ともかく多様過ぎて收拾がつかないのだ。

二：そこで、その図書館の設置意図に戻るのですよね。

ラ：そうなのだよ。日本だと気にしなくて良いのだが、インドでは地域ごとに色々な言語があるから、公共図書館が本を選ぶ時、どの言葉の本を買うかも考えねばならない。

二：日本の選書って楽ですね (苦笑)。

ラ：そうそう、羨ましい。

二：本人たちは、英語ができない、とコンプレックスを感じているようではありますが、幸せですよ。

ラ：うむ、図書館的にはね。

二：日本の公共図書館であれば、原則、日本語の本を選書すれば良いですよ。でも例えば先生のおひざ元だったマドラス、今のチェンナイでは、タミル語という現地語が話されています。

ラ：そうなのだ。大学図書館では、英語の学術書だけを選書すれば良いので、インドの図書館の中でもこの問題は比較的軽い問題

だ。しかし市民が使う公共図書館は、英語の学術書も大事であるが、地元の言葉の本を中心に揃えなければならない。

二：タミル語は歴史が古く、学術書や哲学、宗教書、そして文芸書も数多くあります。

ラ：何せ、約7,400万人も話者がいると言われていて。そのため公共図書館では、タミル語の様々な図書を、幅広く網羅的に備えなければならない。まさに「いずれの読者にもすべて、その人の図書を」を实践せねばならない。

二：あとタミル語のみならず、インドで一番話者



タミル語の児童書

が多いヒンディー語や、隣の州の言葉、例えばカンナダ語、テルグ語・・・といった本も必要な気がします。

ラ：うむ。様々な人が住んでいるからね。

二：これを書いている筆者さんは、昨年の秋に実際、英語とタミル語が混在する公共図書館の書棚を見てきたそうですよ。

ラ：百聞は一見に如かず、だ。日本ではイメージできないことなので、実際に見ると良いのだよ。ん！？これって、コネマラ公共図書館（注 チェンナイの公共図書館）？

二：そうです。ほんとうに行ったのだそうです。

ラ：え！？ ほんとう！？？ おおおお！！ 懐かしい！ 私が（嫌々）図書館員になって（ならされて）、働いたところではないか！！（注：ランガナタンはマドラス大学の図書館に勤めたが、当時のマドラス大学図書館は、このコネマラ公共図書館に間借りしていた。）

二：そうです。先生が学生時代から使っていた、思い出の図書館です。

ラ：いやあ、ありがとう。良いものを見せてもらったし、まだ壊されず使われていることに感動だ。

二：おっと、そろそろ時間です。さて、私のモットー「いずれの読者にもすべて、その人の図書を」に基づ



英語とタミル語が混在する公共図書館の書棚（コネマラ公共図書館）



コネマラ公共図書館・旧館（1890年開館）

いた選書について3回に渡って教えて頂きました。

ラ：第二法則と選書についてまとめると、「図書館利用者の欲求・要求

に則って選書せよ。」ということだ。利用者一人一人の読みたい気持ちに、寄り添うのだ。その実現のための利用者願望の把握方法には、色々な手段がある。その方法を使って、不断に把握して行ってくれたまえ。もちろん利用者の願望だけで、蔵書構築をしてはいけけないので、他の法則との兼ね合いは意識しながら、第二法則の理念を実現するべきである。

二：最後まとめて頂き、先生、本当にありがとうございました。このまとめは、現場の図書館員さん達が悩んだ時に、図書を選ぶ時の基本的な考えになりますね。

ラ：さて、次回からは第三法則くんだね。

二：はい、私の性格の真逆なので、ひとつよろしくお願いします。

ラ：とはいえ、同じ方向を目指しているから、大丈夫だよ。

二：そうですね、それではまた！

（よしうえ しょうえい：東北大学附属図書館）